

かれの流儀

——エヴァレット・ヒューズとの対話(1)——

On His Way of Doing Things: A Dialogue with E.C.Hughes

内 田 健

Ken UCHIDA

わかりやすく書くことへのこだわりにかけて、エヴァレット・ヒューズは一種常軌を逸していた。同じことを平易な言葉でいえるのなら、空っぽで抽象的な用語を使う必要などまったくない、それがかれの考えだった。(Becker 2005)

この完璧な社会学者は、書くことにかんして自前の流儀 style をもっていた。それに、かれが書くことを楽しんでいたのは間違いない。(Strauss 1996: 272)

はじめに

米国の社会学者、E.C.ヒューズの遺産をめぐることは、近年、細々とではあるが、再読・再評価の気運がもちあがってきた⁽¹⁾。なかでも、フランスの社会学者J-M.シャプーリとカナダの社会学者R.ヘルムズ-ヘイズ(Chapoulie 1987, 1996; Helmes-Hayes 1998a, 1998b, 2000)の仕事は、幅広さと深さの両面で一頭地を抜いている。

ふたりはそれぞれ、ほぼ同じ時期に、ほぼ同じ資料をたよりにヒューズの足跡を追ってきたが、結果として描きだされたヒューズ像は、それぞれちがう角度からとらえられ、別々の構図におさめられた、かなり趣を異にする作品として提出されている。その違いは、シャプーリが「エッセイストとしてのヒューズ Hughes the essayist」を前面に立てるのにたいし、ヘルムズ-ヘイズが「理論家としてのヒューズ Hughes as a theorist」を強調しているところに、もっとも顕著にみとめられる(Chapoulie 1996: 25; Helmes-Hayes 1998a: 626, 1998b: 220)。

前稿(内田 2003)でも述べたように、後に続く私たちとしては、二枚のヒューズ像を、互いに斥けあうものとみる必要はない。むしろふたつを重ねあわせ、より立体的にヒューズ of 社会学的思考の特質を浮きあがらせるよう努めることで、ふたりの論説を発展させる途も開かれるはずだ。本稿では、ヒューズの著述スタイルとかれの思考スタイルを、互いに結びつけている糸の在処を探ってみたい。より具体的にいうと、ヒューズが構想した「社会学」を実行するうえで、「エッセイ」という著述形式の選択がほとんど不可避だったことを示すこと。それが、ヒューズの遺したテキストとの対話をとおして以下で取り組まれる、ささやかな課題である。

1. 読むこと

よほど特別の事情が介在しないかぎり、たいていの人は、「書くこと」に先立って「読むこと」を経験する。文字を読むことができないのに書くことだけにはできる人の存在を想定するのは、きわめて難しい。だからここでも、まずは「読むこと」にたいするヒューズの姿勢をみることから始めよう。

ヒューズはいくつかのテキストで、みずからの読書法的一端を開陳している。たとえばこんなふうに。

考えてみると、私は本を読むときでも自由な連想 free association に従っている。「このあたりのことについて、ジンメルは、あるいはデュルケムやウェーバーやミードやマーシャルやほかの誰かは、何か言っていなかっただろうか？」私はじっさい、索引を調べることから読書をはじめることが多い。(Hughes 1971 = SE: xvi)⁽²⁾

上記文中に登場する「自由連想」についてはあとで立ち返ることにしよう。ここで明かされている本の読み方は、古典的なテキストの使い方についてかれが書いていることとも気脈を通じている。

私の考えでは、自殺についてデュルケムが、プロテスタンティズムについてウェーバーが、マージナル・マンや人種関係サイクルについてパークが、それぞれ立てた特定の仮説を取りあげ、全精力を傾けてかれらの間違いを証明することに、膨大な時間が浪費されてきた。もちろん、そんな証明もやってやれないことはない。[だが、] こうした人たちから、とりわけ、経験的手法が現在のような発展をみる以前に仕事をおこなった人たちから手に入れるべきは、一般的な問題群の叙述や一群の概念、そしてときに、自分の思考の質を高め、自分が現在関心を寄せている問題群の解決法を示唆してくれる、いくつかの有益な仮説や着想なのである。(Hughes 1961b = SE: 565)

同じ趣旨がより簡潔に述べられている箇所も引こう。直接には、ヒューズが三巻本として編んだ R.E. パークの論文集に關説した部分である。

著者の没後に編まれた論文選集は、十全の意味で「本」とはいえない。著者本人の手にかかったばあいと同じ順序で、かれの思想を配列したものではないからだ。そうした選集にふさわしい読み方は、ある問題なり着想なりに興味を抱いたときに拾い読みしてみることだ。(Hughes 1964b = SE: 549)

本というメディアの一般的な特性のひとつは、使用者にシークエンシャルなアクセス、つまり、表紙側から順に頁を繰って活字を追ってゆくことを要求する点にあるが、ヒューズは本にたいし、可能なかぎりランダムにアクセスするよう説いている。さまざまな書物をあたかも字引や事典のように取り扱うこと、それがかれの推奨する読書法の要諦である。ヒューズにとって古典とは、目下の関心にレリヴァントな事項について問いかける読者にたいし、いつも豊かな奥行きを備わった回答を返し、実り多い対話の相手を務めてくれる、年長の友人に比定すべき存在だった。年長の友人と同じように、古典もまた、敬意をもって接する後進にこそ胸襟を開いてくれるはずだ。だとすれば、細かな瑕瑾の詮索を目的とする読書より、有益な助言を謙虚に仰ごうとする読書、テキストに秘められた可能性の中心を汲みとろうとする読書のほうが、はるかに生産的な行ないであることだろう。

ところで、上で引いた三つの発言はどれも、読書における主導権をもつのはあくまでも読み手であるべきだ、と説いたものと解される。たしかにヒューズは、読者が使いでのある着想を手に入れる機会になるのがよい読書である、と述べている。一見すると、ヒューズの勧奨する読書法は、「創造的誤読」さえも是認するものであるように映る。読者の知的創造性の向上に寄与するのであれば、テキストの読解にさいして精確さに拘泥する必要は乏しい、読者には誤読する権利すらある、というような。

だがもちろん、そうした居直りの姿勢はヒューズの採るところではない。むしろかれは、テキストを読む

ことについて、人並み外れて厳しい格率を自他に課していた。そのことがよく読みとれるのは、やはり古典との向き合い方をめぐって書きとめられたつぎのような所感である。

若い社会学徒が自分の社会学的想像力を育むには、ひとりでもふたりでも、古典的な社会学者の著作のほぼ全部を、それもできるだけ原語で読むほうが、ありふれた課程をひとつかふたつ履修するよりもはるかに役立つと、私は確信している。通常の課程では、小道に居並ぶステレオタイプ化された人物たちが順に論破されるか、そうでなければ、同じくステレオタイプ化されたほんの一握りの人物が聖典の著者に祭りあげられる一方で、ほかの面々には異端宣告が下される、といった仕儀になる。(Hughes 1961b = SE: 565)

ここでは、古典的テキストと向き合うさいに遵守すべき規律がふたつ示されている。第一に、すべての著作を通観すること、第二に、可能なかぎり原著者がテキストを紡ぐのに使った言語で読むこと、である。順を追ってその含みを考えよう。

第一の、どこか恃むところのある先達の全著作を踏破せよ、という指針は、字引を引くように古典を活用せよ、という指針と矛盾するものだろうか。もちろんそうではない。そもそも、特定の問題にかんして「ジンメルは、あるいはデュルケムやウェーバーや……は、何か言っていなかっただろうか？」と問うことのできるのは、それら先人の遺したテキストの世界にすくなくとも一度は深く沈潜した経験をもつものにかざられる。賢明な「索引使用者」になるには、その本の書き手の仕事全体にわたって満遍なく、多少なりとも精確な理解を自分のものにしておく必要がある。自己の利益に資するものであれば誤解も許される、といった傲慢な態度で年長の友人と対座することは、それじたい礼を失した振る舞いと難じられても抗弁できないだろう。

テキストをできるだけ原語で読むこと、という第二の指針の意図を汲むには、ヒューズが当時の米国社会学界における外国語文献の待遇に呈した忌憚のない苦言を参照する必要がある。いかにもかれらしい流儀で、ヒューズはつぎのように指摘している。

米国の社会学者たちは、ヨーロッパで生まれて教育を受けた人たちをべつにすると、英語以外の言語について桁外れに無知であるし、しばしばその無知を誇らしげに吹聴する向きさえある。このことは、かれらの翻訳への依存度が、やはり桁外れに高いことを意味する。その翻訳についてかれらが頼りにしてきたのは、翻訳元の言語にこそ通じているものの、それにくらべて翻訳先である英語の知識には乏しい、移民の学者たちである⁽³⁾。たまたま1930年代の不況期には、雀の涙ほどの見返りのためによりこんで翻訳に従事する、語学力に長けたアカデミック・プロレタリアートに事欠くことはなかったが、いまではそんな奇特な人物もいない。(Hughes 1961a: 344)

同じ時期に書かれたべつのテキストも引証しよう。

言語の問題は、過去の作品にかんする私たちの知識とも関連する。というのも、過去の作品の多くは他言語で書かれており、学者を自称する世界中の人びとのうちでもっとも語学を不得手とする私たち米国人は、他言語で書かれた著作物のなかで、たまたま翻訳のある作品しか読むことができないからである。これまでのところ、米国の出版業界は、海外の作品の迅速な出版にも、完全なかたちでの出版にも、食指を動かす気配がない。また、よし翻訳出版がいまよりすこしは収益のあがる事業になったとしても、私たちがこれまで翻訳という単調で面白みのない仕事を任せきりにするのに当てこんできた移民や難民の供給は、このさき見込めそうもない。(Hughes 1961b = SE: 559-560)

近代の黎明期からこのかた、外国語（西洋語）の読み書きにひとより長じることが「知識人」たるものの要件であるとされ、海外事情への通曉や洋行体験が箔付けの素材として通用し、「ヨコのをタテにする」ことを生業とする人びとにさしあたり不足することのなかった「翻訳大国」で育ったものとしては、彼我の

対照性に一種の感慨を抱かされる。ともかくヒューズの眼には、外国語文献を冷遇し、国外の研究動向に無関心を決め込む米国学界の風潮が、看過できない問題をはらんだものと映っていた。しかも多くの社会学者は、その「問題」に気づいてさえいない。この件にかんして、ヒューズが皮肉な口ぶりを手控えることはなかった。

私たちは、なににせよ書くほどの値打ちがあるものは、速やかに英語に翻訳されていると嘯く。私たちのなかには、原書を一文字も読んだことがないのに、デュルケムやウェーバーやジンメルジンメルの権威になっている人たちがいる。けれど事情が事情だけに、そんな「権威」たちにとっては、自分が読んできたものが適切に翻訳されているかどうか、それらが統計学的にみて著者の書いたものの適正な標本であるかどうか、あずかり知らない事柄なのである。(Hughes 1961c = SE: 477)

ヒューズは外来知識のやみくもな信奉者として、他言語の修得を軽視する米国学界特有の傾向を嘆いてみせているわけではない。たしかにかれは、カレッジで古典学を修め、ラテン語、フランス語、ドイツ語を自在に操る語学力を身につけていた (Coser 1994: 3)。そのような人物でなければ、上のような言葉をおいそれと吐けるものではない。だが、みずからの語学力を顕示する行ないは、かれじしんが自覚するように、往々にして「自分を一枚上手にみせるための虚勢 one-upmanship」(Hughes 1961b = SE: 559) と受けとめられる。「ひけらかし」との謗りをこうむることも厭わず、ヒューズが各所で他言語の習得にこだわりをみせた「真意」はどこにあったのか。その事情を斟酌するうえで参考になる、身近にいた人物たちの追想がある。

[ヒューズは、] 必修科目を課すことじたいを好みはしなかったが、学部や大学院で外国語が必修科目から外される様子をみて悲しんでいた。かれにしてみれば、フランス語やドイツ語をよどみなく用いて卑俗な事柄と高度な教養にかかわる事柄の両方を表現することは、市民や学者がコスモポリタンであるために欠かすことのできない基盤だったからだ。(Riesman and Becker 1984: xii-xiii)

ひとりの市民、ひとりの学者として、「コスモポリタン」を体現すること。それが、ヒューズの従った準則だった。これはかれの社会学的思考の特質を捕捉するうえで重要な示唆を与える証言である。ふたりの言い伝えを素朴に受けとるなら、英語以外の言語で記されたテキストと翻訳の媒介なしに直接向き合うことをヒューズが飽かずに説きつづけた事実を、たんなる語学力云々の問題に切り詰めるのは、明らかに不当な取り扱いである。

そうした観点から「原書知らずの「権威」」を痛罵した上の引用文を見返すと、そこで矢継ぎ早に三つの問題が提起されていることが読みとれる。第一に、「たいがい英語だけで事足りる」と高を括った態度の背後にうかがえるエスノセントリズムの問題。第二に、翻訳(標本)がコーパス(母集団)を適正に代表しているかの問題、つまり部分と全体の関係をめぐる問題。第三に、翻訳(解釈)の適切性を保証しようとするさいにつきまとう原理的な難題である。私の考えでは、これらすべては、ヒューズが「社会学する」にあたってこだわりぬいた中核的なテーマにかかわっている。次節以降で、三つの問題を順次検討することにした。

2. エスノセントリズムの問題

ヒューズは50年代の終わりくらいから、W.G. サムナーの造語として知られ、長いあいだ社会学の知識倉庫に保管されていた「エスノセントリズム ethnocentrism」という言葉を、埃を払ったうえでしばしばテキストに登場させている。かれは、(とりわけ米国の)社会学者に向けて、エスノセントリズムの侵襲にたいする警戒をくりかえし呼びかけている。

まずは、ヒューズによるこの言葉の釈義を紹介しよう。

エスノセントリックである、ということの意味は、一通りではない。もっぱら自分じしんの帰属する社会的世界の観点でばかりものを考え、ひとつの社会的世界をべつのそれと比較するための概念群の持ち合わせがまったくない人がある。自分の世界の習俗や観念をあまりに深く信じ込んでしまい、ほかの民族や時代や地域を検討するための参照点をもっていない人がある。あるいは、自分じしんの世界に注意を奪われるあまり、ほかの世界、自分にかかわりをもたないほかの世界への好奇心に欠けた人もいる。(Hughes 1961c = SE: 474)

エスノセントリズムに罹患すると、自分が置かれた社会的な時空間に安住し、自明視された世界が自分の思考や信念や関心領域におよぼしている制約や拘束をつゆほども疑おうとしなくなる。距離をとって事象の意味を吟味すること、相対化の契機をけっして手放さないことなどに、一片の値打ちも認められはしない。世界の偶有性にたいする感受性は、徹底して鈍麻させられる。

ヒューズにとって、エスノセントリズムの罹患患者ほど「社会学する」資格を欠いた存在は、ほかに考えられなかった。上の引用文は「エスノセントリックな社会学」と題したテキストから採ったものだが、本来であればこの文題は、修辞学でいう撞着語法の一例でなければならないはずのものだ。だが、ここでは明らかに、文題の含意を字義どおりに受けとることが要請されている。すなわち、「エスノセントリックな社会学」はげんに存在する、というように。だとすれば、ヒューズはどんな症候を手がかりに、そうした診断を下しているのだろうか。かれの見立てによれば、問題の淵源は「方法論上の偏向」にある。

社会学者たちは、エスノセントリズムという言葉を発明したまではよかったが、みずから方法論上のエスノセントリズムに陥ってきた。かれらが開発してきた手法は、膨大な数の人びとが、ひとつの共通言語を話すという前提に基礎をおいている。ここで共通の言語とは、所定の言葉が大半の人びとにとっておおよそ同じ意味をもつことの謂いである。私たちのテクノロジー、俗にいう方法論は、研究すべき重要な事柄は同質性という堅固な背景のもとでの些細な差異であると、初手から決めてかかっている。(Hughes 1962b = SE: 71)

言語という複雑で繊細な現象を取り扱う手つきの粗雑さが、ここでもやり玉にあがっていることに注目しよう。ヒューズからみれば、こうした浅薄な言語観は、米国の研究者の通弊である他言語体験への軽蔑的な態度と、明らかに底の部分で緊密に通じあっているものだった。上で念頭におかれている「手法」と「方法論」、それぞれの具体例は、40年代半ばごろから米国の学界で隆盛を誇っていたサンプルサーヴェイであり、R.K. マートンが提唱した中範囲の理論構築 middle range theorizing である。上の引用文はこうつづく。

研究者は巨大な全体を代表するものとして小規模の標本を選択すればよいし、フォードとそのほか二、三種のクルマを選択肢に入れておけば、誰もが○をつけるものと想定することができる。この調査票のなかに、クルマを購入する余裕のない人びとの入る余地などない。(Ibid.)

狭窄状態に陥った視圏から外され、想像力のおよぶ境界の外部に追いやられるのは、国外の動静だけにとどまらない。標準的な消費生活を享受できる所得水準を下回る国内の社会層、すなわちミドルクラス以下の階層に帰属する人びとの存在もまた、「研究すべき重要な事柄」の枠組みから見事に除外される。「急進的で気性の荒い人びと、より極端なかたちをとる不満やコンフリクト」(Ibid.)、「分布曲線の両端部分」(Hughes 1961c = SE: 476) を切り捨てることで実現された、調査手法の標準化と洗練。そこに、ヒューズはサンプルサーヴェイの方法論のエスノセントリズムを看取る。

米国のような高度消費社会は、使用言語、趣味嗜好、消費財として流通する文化や商品にかんする既知知識、等々について、ほぼ等質的な大衆の存在を想定することができるという意味で、サーヴェイ調査者にとっては一種の「天国」なのかもしれない。だが、「天国は、えてして退屈な場所になりがちなものだ」(Ibid.) という考えの持ち主だったヒューズは、こう訴えずにはいられなかった。

もしも社会学が、アメリカ人、大衆、中範囲の分布、分布曲線の中央部分、富裕な人びと、些細な変化しか起こらない世界、誰もが英語を話す世界、そして、(女性をふくむ)誰もがズボンをはいた世界⁽⁴⁾だけを研究するようになったなら、私はこのうえなく失望することだろう。(Hughes 1961c = SE: 477)

3. 部分と全体の問題

エスノセントリズムとは、裏返していえば「エクセントリックなものは私たちの関心事ではない」(Hughes 1961c = SE: 476) という態度である。だとすれば、エスノセントリズムに罹患したものへの加療方針としては、「エクセントリックなもの」の追究を勧めるのが有効、ということになるのだろうか。むしろ、それでは解決にならない、なぜならそれは、いわばネガとポジを反転させたにすぎないからである。

ヒューズはエスノセントリズムの対極をなす世界との向き合い方を形容するのに、「エスノエクセントリック ethno-eccentric」という言葉を用いている (Hughes 1959 = SE: 450, 1962b = SE: 71)。この表現の適用対象としてかれが念頭においたのは、本格的な近代化のプロセスから隔てられた場所で旧来の生活様式を墨守してきた小規模な社会の探查と記述に従事する、人類学者たちの営みである。エスノセントリズムが「現在」と「自文化」にもっぱら関心を集中する求心性を特質とするのと対照的に、「過去」と「異文化」に関心を限定するエスノエクセントリズムの特性は、その遠心性にある。

かくして、米国の学術界には、一方にいま・ここを研究する人びとから成る部門が、他方にかつて・あそこを研究する部門が、それぞれ成立するに至った。このばあい、「かつて・あそこ」に大都市や政治運動や経済変動はふくまれない。これでは、人間の諸社会の完全なカヴァレッジが私たちのものになったなどとはとうてい言えまい。(Hughes 1961c = SE: 475)

「いま・ここ here and now」に関心を局限する社会学にしても、「かつて・あそこ there and then」だけをみずからの土俵として囲い込む人類学にしても、さまざまな社会(全体社会と部分社会)の「完全なカヴァレッジ complete coverage」への志向を欠いた営みに自足しているという意味で、抱えている問題は同根である⁽⁵⁾。かれの考えでは、エスノセントリズムとエスノエクセントリズムの両方にとってただひとつ有効な加療方針は、「いま」と「かつて」／「ここ」と「あそこ」を包摂するパースペクティブの獲得を、つよく促すことだった。現在と過去、卑近な場所と遠く隔たった場所、その両者をともに収めた構図がとれる視点をつねに探索すること。ヒューズの社会学的分析を駆動した「比較」という方法は、たんにかれの嗜好が採用させたものではない。視野狭窄を回避する手立てとして、かれが採るべき方策は比較法の徹底であるはかなかったのである。

ヒューズはすくなくとも規制的理念として、「部分」ではなく「全体」、「特殊」ではなく「普遍」をとらえることを、社会学が掲げるべき目標と考えていた。このばあい「全体」とは、空間的な意味でのそれにとどまらない。かれは視野に編入すべき社会の範囲について「完全なカヴァレッジ」(単数形でなく、複数形の「社会」)を要請するばかりでなく、「あらゆる範囲にわたる問い」(Hughes 1962c = SE: 460)を提起することを要求した人物でもある。サンプルサーヴェイにたいして表明された不満は、それがもっぱら「標準」や「平均」を「全体」の「代表値」として、つまり「全体」を代理的に表現する「部分」として扱いながら、そこから逸脱する存在を不当に除外している点にあった。また、中範囲理論への不満は、それが研究者の力がおよぶ範囲内で「検証可能な問い」だけを扱うという一見謙虚な姿勢を盾にして、取り扱いのやっかいな問題の回避を正当化している点にあった。それぞれの論点を、かれの言葉で確認しておこう。

米国の社会学者の大多数が採用している手法は、かれらの特異な人びとや極端な行動から遠ざけている、と言っても、あながち不当ではない。(Hughes 1964a = SE: 160)

私たちが社会科学と考えている営みは、あまりにも経験主義的で、こちんまりとした仮説群に適合する事実の細かな寄せ集めにばかり気をとられすぎているために、広範囲の可能性を受け入れたり、まずはあり

そうでない社会的事情の組み合わせを徹底して追究したりすることに、力を発揮できずにいるのかもしれない。(Hughes 1963 = SE: 493-494)

ヒューズのばあい、「全体」の捕捉を志向することは、「部分」を蔑ろにすることを意味しない。個別の社会的世界のもつ多様で特異なディテールについての深い認識を繰り込まずに描かれた「全体」ほど空疎なものはない。かれに言わせれば、キャリアの途上ですくなくともひとつは「特殊社会学 special sociologies」に深く関与した経験のないものが、「一般社会学 general sociology」に有益な貢献を果たす見込みは乏しい (Hughes 1957 = SE: 526)。「部分」を精確に記述・分析できたものだけが、その射程を「全体」に向けて引き伸ばすことができる、というのがかれの考えだった。

それでは、「部分 (特殊)」から「全体 (一般)」へアプローチするにはどうしたらよいか。すでにみたように、「部分 (標本)」に「全体 (母集団)」を代表させ、前者から後者を推計する、といったサンプルサーヴェイのやり方は、ヒューズをけって満足させることがなかった。かれの対案は、つぎのくだりに圧縮されている。

[一般化 generalization は、] 人びとが相互行為に従事している数多くの実際的な組織や状況についての、観察と記述と比較から生まれる。社会学的な一般化は、特殊社会学や応用社会学から生まれ、また、特殊ないし応用社会学へ適用されるのである。(Hughes 1957 = SE: 525 強調は原文)

「部分」についての観察と記述を、べつの「部分」についてのそれらと比較することで、「全体」すなわち「一般的な像」をかたちづくっていくこと。さらに、そうして形成された「一般的な像」をふたたび「部分 (特殊領域)」の観察と記述に適用することで、その頑健性を点検すること。「部分」から「全体」に漸近する通路には、そうした往復運動が可能な道幅が確保されていなければならない。社会の「全体像」を描こうとするなら、むしろ「部分」の挙動にじっと目を凝らし、「部分」と「部分」の差異と類似性の両方を精確に見定めることから始めなくてはならない。このようにヒューズは、「部分」と「全体」のダイナミックな連関を強調する。かれの考えからすると、「全体像」は、静止画ではなく動画として、描出されなければならない。

4. 解釈の問題

R. ベンディクスが1960年に刊行した著作 (*Max Weber: An Intellectual Portrait*) への書評で、ヒューズは「翻訳 translation」という行為に伏在する問題について、かなり立ち入って論じている。

ベンディクスの著作⁽⁶⁾は、「[M.] ウェーバーの学問的業績の経験科学的内容を、彼の問題意識に即して再構成し、包括的な肖像にまとめあげたもの」(折原 1966=1988: 583) だった。再構成にあたってベンディクスが引用したウェーバーのテキストは夥しい量にのぼる。そのさいかれは、引用文の一部については既存の英訳書を用い、他の部分はドイツ語の原文から自分で英訳したテキストを掲出している。

ヒューズは書評の冒頭で、ベンディクスが対象書でおこなったウェーバーの業績の体系的な概括をすぐれた達成としておおいに賞揚したうえで、ベンディクスが採用した訳語の選択について、批判的なコメントを寄せている。そこでヒューズのコメントを駆動するのは、「翻訳の途上で、原著作の身の上にはどんなことが起きるのか？」という問いである (Hughes 1961a: 344)。

ヒューズは考察の題材として Stand (身分) という言葉を俎上にのせる。ベンディクスは同書 4 章序論の註記で、「私は、status group が Stand [身分] の適切な訳語であると信ずる。中世社会においてこの語は、もともと「領地 estate」を意味していた。しかしウェーバーのこの語の用法は、それ自体の下位文化^{サブ・カルチャー}をもち、局外者を排除する凝集的社会集団の事例をすべてふくむものである」(Bendix 1962 = 1987: 271) と言明し、Stand を estate ではなく status group と英訳する方針を全編にわたり貫いている。

ヒューズはこの判断に異議を唱える。かれの考えでは、Stand はもともと「局外者を排除する凝集的社会集団の事例をすべて」包摂する言葉として使われてきたものではなく、もっぱら相対的に高い威信をもつ社

会集団を指し示してきた。「歴史的に使われてきた英語の言葉で、言及されている現象に対応する」のは、むしろベンディクスが退けた *estate* のほうだ、というのがかれの所見である (Hughes 1961a: 346)。

ヒューズがこのことにこだわるのはなぜか。 *estate* にも *Stand* にも、英語やドイツ語を使って生活してきた人びとが長い時間をかけて染みこませてきた意味の厚みがあり、個別の単語の使用にさいしては、それが内包する「含み pregnancy」をおいそれと除去するわけにいかない、という認識があったからだ (*Ibid.*)。明確かつ論理的に首尾一貫した美しい体系の構築を企てる理論家は、「含み」、つまり多義性や曖昧さを敵視し、取り除こうとするが、「そのばあい私たちは、一群の用語を、それを適用するつもりでいる諸社会とくらべてより厳密なものに仕立てあげることになるだろう」 (Hughes 1961a: 346)。

同じ批判は、ベンディクスが *Stand* と *Klasse* を相互排他的な概念として対比していることにも向けられる。ベンディクスによれば、ウェーバーの用語系では、もっぱら経済的諸条件の規定を受けて形成される集団が *Klasse* = *class* (階級)、それ以外の社会的諸条件が機縁となって形成される集団が *Stand* = *status group* (身分) と、それぞれ呼ばれる (Bendix 1962 = 1987: 86-87)。だが、ヒューズに言わせれば、こうした弁別はふたつの意味で不当である。第一に、原テキストでウェーバーの用語法を参照すると、両者は必ずしもそのように截然と区別されていない。第二に、英語使用者は *class* という言葉を、経済外的な要素をふくむライフスタイル全般の違いによって特徴づけられる集団のカテゴリーとして用いてきた。だからヒューズはこう言わなくてはならなかった。「*class* と *status group* を厳格かつ過度に切り離すことは、ウェーバー、英語の慣用法、そして生活の実態 *facts of life* を歪めるものである」 (Hughes 1961a: 347) と。

私には、ヒューズがベンディクスの労作に加えた指摘の可否を、ここで詮索する資格はない。しかし、ヒューズがベンディクスの訳業を、並の水準をはるかに上回るものと高く評価したうえでコメントしていることに注意したい。つまり、ここで照準が定められているのは、個別の訳語の可否などではない。翻訳、あるいは解釈という行ない一般に——それがどれほど整然としていても、あるいはむしろ、整然としているときにかえって——随伴するある現象、それが、ほんとうの標的である。以下の箇所に、かれの考えが集約されている。

おそらくは数学の術語を除くと、ほぼすべての単語は、時間の経過にともなっていくつもの意味や意味のニュアンスをまとめてゆく。任意の言語中の任意の単語に付着したすべての意味が、べつの言語中の任意の単語に付着していることは、きわめて稀である。たとえそれに近いばあいがあったとしても、ニュアンスには違いがあるだろう。だが、翻訳者はしばしば、首尾一貫性の確保に気をとられ、所定の単語をすべて同じように訳す決断を下す。かくして翻訳は、原文 *the original* のもつ弾力性 *elasticity* の大半をとりこぼすことになる。 (Hughes 1961a: 346)

翻訳にあたって、原文の弾力的で豊かな含みをもつ言葉遣い *the elastic and pregnant phraseology* を透明で明確なものに変更する *crystallize* こと、それが、私たちのしてきたことであるように思う。 (Hughes 1961a: 347)

翻訳＝解釈は、「原文」や「生活の実態」のもつ多義性や凹凸を、削ぎ落とし、平坦に整地する傾きをもつ。一般に翻訳＝解釈の成果を評価するさいに、「明確であること」や「首尾一貫していること」には高い配点が与えられるが、ヒューズの眼は、その裏側で払い落とされる、言葉や生活実態の伸縮自在で多義的な性質に向けられている。だがそうはいっても、私たちは、翻訳＝解釈という行為を離れて「社会学する」ことができるだろうか。そうして「こぼれ落とされるもの」を保存するために、翻訳＝解釈を断念すべきなのだろうか。

そんな疑問へのヒューズの答えは、明らかに「否」である。かれにとっても、翻訳＝解釈が社会学という営みに欠かせない契機であることに変わりはない。かれはある箇所で、特殊社会学で得られた知見を一般社会学に組み込むことを、特殊領域の研究で開発された「語彙 *vocabulary*」を「社会学的な概念や知識の共有在庫」で通用する「言語」に「翻訳」することと同視している (Hughes 1957 = SE: 526)。あるいは、社会学者は、研究対象となる人びとが使用する言語、研究者どうしの知見のやりとりで用いる言語、得られ

た知見の伝達先である公衆がなじんだ言語、の三つに通曉する必要があるとも説いている (Hughes 1962c = SE: 462-463)。かれの考えでは、すぐれた社会学者は同時に優秀な「通訳者 translator, interpreter」でなくてはならなかったのである。

「原文」や「生活の実態」の弾力性や豊かな含みをできるだけ保存しながらおこなう翻訳＝解釈の実践。ヒューズはそれを、「書くこと」をとおして試みた。

5. 書くこと

ヒューズは、自分の志向する社会学的実践のありようや、社会学者に似つかわしい振る舞い方にかんする見解を、しばしば自分が模範とする先行者への評言に仮託するかたちで慎ましやかに表明している。パークや、G. ジンメルや、G. タルドのテキストの何が自分を魅了するのか語ることをとおして、かれは自分の社会学的な営みを方向づける「導きの糸」の一端を明かしている。

管見のかぎり、かれが「エッセイ」という著述形式のもつ特長に唯一はっきりと言及しているのは、パークのテキストについて述べられた下記の箇所である。「マージナル・マン」の概念がはじめて提起されたテキストとして知られる「人間の移住とマージナル・マン “Human Migration and the Marginal Man”」(1928年)について、かれはこう書いている。

私はそれ [パークの上記テキスト] をエッセイと呼ぶ。というのもそこには、深みと幅広さと仮説の豊かさが備わっているからだ。いずれも、通常の学術論文 scientific paper では要求も期待もされない要素である。(Hughes 1949 = SE: 220)

ここで言われる「深みと幅広さと仮説の豊かさ」は、「洞察 insight」の成分を名指したものと解されよう。すなわちヒューズは、「洞察」を内蔵したテキストを「通常の学術論文」と区別して「エッセイ」と呼んでいる、ととらえることができる。ヒューズのテキスト空間を丹念に踏査しながらその特質を捕まえようとした人たちは、しばしば「洞察」という言葉を援用している (Coser 1994: 13; Strauss 1996: 272, 273)。ヒューズじしん、「洞察」という言葉を使って寄せられる賛辞を満更でもない様子で受け入れている。いかにもかれらしい控えめな物腰は崩さずに心情を吐露している一節を、すこし長めに引いてみよう。

仕事のうえで、私は自由連想をおおいに頼りにしてきた。連想の自在さ a freedom of association は、なにか既成の利害関心とか大切に懐いている感情を守ろうとする人びとにとって、突飛に outrageous 映ることもあったろう。……中略……社会学的想像力の核心は、自由な連想である。自由な連想は、無意識の手前あたりに内在化されている参照枠の案内に従いはするが、その動きを妨げられることはない。夢のなかですら働かなければならないけれど、意のままに呼び出すことができる場所になければならないのである。人びとはしばしば、私の仕事には洞察が示されている、と評してくれる。その「洞察」とは何だろう。集中して観察すること、方向を転換して、古い概念どうしを新しく結びつけたり、新しい概念を発見したりすること、そんなことから生まれる何かしらの性質というよりほかに、私に心当たりはない。(Hughes 1971 = SE: xvi)

ここではかれの考える「洞察」の構成要件が適切に指摘されている。ヒューズにとって、「観察の強度」と「自在な方向転換」とは、深みと幅広さが同在するテキストの編成をめざして動員される思考が欠いてはならない条件だった。しかもこのふたつは、互いに連携しあうことで、その威力を倍加する。そのように両者を緊密に結びつける方法が、ここで語られている「自由連想」である。

ヒューズはある箇所で、社会学者が観察というゲームで演じる役割を「泥棒を捕まえようとする泥棒」(Hughes 1964a = SE: 159) に喩えている。観察対象の皮膚の下深くまで爪を食い込ませようとする行為は、観察者とその対象の双方にとって、心地のよいものではない。観察の深度が増すことで、するものとされるもののあいだに生じる摩擦も増大してゆく。観察とは、「泥棒」＝観察対象が意識的ないし無意識裡に隠し

ている秘密を明るみにだそうとする振る舞いだが、目的を果たそうとする観察者もまた、対象の懐の奥深く手を差し入れて獲物をつかみだそうとするもうひとりの「泥棒」となるはかない。首尾よく仕事をやり遂げたい「泥棒」は、しばしば突飛な outrageous 手段を駆使して相手の裏をかこうとする。たとえばそれは、「比較」という方法である。

人間の営みを研究するものたちのなかに、比喩的な意味と文字どおりの意味の両方で、他人の領分に土足で踏み込む連中がいても不思議はない。人間の研究は、軋轢を生じる不躱な improper 行ないなのだ。どんな社会状況も、そのなかに住まっている人びとにとっては多少なりと愛着の対象である。それをほかのいろんな状況と比較することは、負け犬の悪行のひどさを和らげ、そのなかで恵まれた場所を占めている人びとの美点を損なう仕業のように受けとられる。(Hughes 1956 = SE: 441)

これは“Improper Study of Man”と題したテキストの一節だが、文題からして、proper (適切な・礼儀正しい)/improper (不適切な・不作法な)という言葉の多義性に注意を怠るとたやすく読み違えてしまうように仕組まれている。上の箇所からも読みとれるように、このテキストは「人間の不適切な研究」に批判を加えたものではない。むしろ、「危険をおかす不作法な improper」研究者こそが「人間の適切な proper 研究者である」(Hughes 1956 = SE: 442)という逆説的な事情の存在に、注意を促そうとしたものなのである⁽⁷⁾。

「不作法な」研究者は、「偉ぶらない人びとと尊大な人びと the humble and the proud」(Hughes 1970 = SE: 417)を、あるいは「名高い研究所の実験室と潰け物工場の乱雑な大樽部屋」(Hughes 1951a = SE: 342)を、さらには「配管工と医師」「精神科医と売春婦」を、仮想のまな板に並べて無造作に比較する。

人間の仕事の研究に比較法を使うものは、配管工の研究をつうじて医師について学び、精神科医の研究をつうじて売春婦について学ぶ。これら二組のメンバーどうしが偶然の確率を上回って似通っていると言っているわけではない。あらゆる仕事は、それぞれが威信や道徳の格付けに占める場所と関係なく同一線上に並んでいる、と仮定するところから研究をはじめべきだと言いたいだけだ。……中略……さきにあげた二組の職業には互いにかなり似通ったところがたしかにありそうだ。医師も配管工も、困っている人のために秘密めいた技術を使う。精神科医も売春婦も、内密の問題を抱えてやってくる客との個人的な関係に深入りしないように注意しなくてはならない。(Hughes 1951b = SE: 316)

「日常的な思考の軋や道徳的抑制をきっぱりと断ち切った」もの、「狂信的なまでの超然とした態度 almost fanatical detachment」を習性とするもの、すなわち、あらゆる制約を振り払って「想像力の解放 freeing of the imagination」を実行するものだけが、こうした「不躱さ」を貫徹することができる(Hughes 1963 = SE: 494-495)。しかもその「不躱さ」は他方で、思考の振幅の拡張にも貢献する。テキストの読者は、「同一線上に並んでいる」配管工と医師、精神科医と売春婦、それぞれに組み合わされた職業従事者のルーティンに、代わるがわる目配りするよう求められることになるのだから。

「想像力の解放」つまり「連想の自在さ」をヒューズが最後までけっして手放すことがなかったのは、かれにとって、それが自分の観察の深度と振幅の両者を確保し、「不作法」という名誉ある非難を甘んじて受けるのに不可欠な契機だったからである。「よい社会学は、いつもマージナルな現象である」(Hughes 1957 = SE: 529)というかれの言葉を、私たちはそうした文脈に位置づけて理解すべきである。一足先に「科学」の地位を確保した学問分野で開発された手堅い手法の上辺ばかりを真似ようとする社会学者たちを、かれが苦々しく思っていた(Hughes 1962a = SE: 352-353)のも、社会学という営みに伏在する「後ろ暗さ」を直視していたからだろう。

生前のヒューズに身近で接していた人たちは、かれの話しぶりや書きぶりの特徴を、「散漫でとりとめのない discursive and wondering」「取り散らかった messy」(Riesman and Becker 1984: vii)、「ひとを当惑させる confusing」(Coser 1994: 8)、「とらえどころのない elusive」「曲芸的な飛躍 acrobatic leap」(Coser

1994: 11), 「あてどない aimless」「くだけた調子の informal in tone」(Strauss 1996: 273), 等々と異口同音に評している。L. コーザーが述べているように, 「ヒューズは自分の着想を, 思考の直線的な進行によって展開することはなかった」(Coser 1994: 11)。

これらの評言は, それじたい, かれがスピーチやテキストの編成で「自在な方向転換」を実践したことの証左といえるだろう。かれの思考をたえず駆りたてたのは, 「ことは違ったふうでありえたかもしれないに, なぜそうではなくこうなのか」(Riesman and Becker 1984: x), あるいは, 「それはほかにどのようにありえたのか」(Strauss 1996: 272) という問いだった。現実を観察している事態の記述と「代替的な可能性の条件 alternative possible condition」(Ibid.) の記述とをつねに並行させるテキストでは, 思考が目的をめぐって最短路をまっすぐに突き進むことなど, どだい不可能だった。寄り道や脱線にうちまわったヒューズのテキストは, やはり学術論文というよりエッセイと呼ばれるのがふさわしい。

ヒューズのテキストがこうした特徴を備えていることは, 前節で検討した「解釈」行為にかんするかれの見解ともよく見合っている。「解釈」は十分におこなわれなくてはならない, ただし「生活の実態」のもつ弾力性や豊かな曖昧さを粗暴な手つきで損なうことのないようにして。これが, ヒューズが課した難題だった。

かれは個別の文を平易な表現で明晰に書くよう, 学生たちに説き, 自分でもそのことに努めた。にもかかわらず, かれが書きのこした文章は, 上でいくつかの実例に則してみたように, 読むものに「透明な」見通しを与えるものではない。テキストの追跡は, 途中で出くわすいくつかの窪みに足をとられないように, 注意ぶかくすすめなければならない。

ヒューズが私たちを招き入れようとする言説世界 universe of discourse には, 歩行者を直進させまいとする仕掛けが随所に凝らされている。私はそこに, 「生活の実態」が含有する豊かな曖昧さや意味の弾力性を再現するようなテキストの編成に挑みつづけた人物による, 試行錯誤の痕跡をみとめる。neat な, でなく——すぐれて messy な営みとして社会学を実践したヒューズにすれば, 自分の思考の軌跡をまるごと表現するのにもっとも適したエクリチュールの容器として, エッセイというスタイルを採用するのは, ごく自然なことだったのである。

註

- (1) ヒューズをめぐる論説の軌跡は, (内田 2003) で振り返っておいた。
- (2) 以下, *The Sociological Eye* に収載されたテキストからの引用は, 初出年次を表示したうえで, SE の略号のあとにページ数を示す。なお, すべての引用文中の [] による補足と傍点による強調は, 断わりのないかぎり引用者によるものである。
- (3) 「翻訳元の言語」に通じていた「移民」と「翻訳先の英語」を自在に使いこなすことのできた「米国人」とのあいだで, 「共訳」作業のプロセスにおいて発生したコンフリクトの一事例を詳らかにしたドキュメントとして, (Oakes and Vidich 1999) を参照。この事例での「移民」は H.H. ガース, 「米国人」は C.W. ミルズである。
- (4) この部分には, ジェンダーをめぐる現代の論議の水準からみて「政治的に正しくない」含意がある。フェミニズムが提起した問題をヒューズがどう受けとめていたかについては, (Hoecker-Drysdale 1996) が詳しく述べている。
- (5) ヒューズは, シカゴ大学の大学院で一学科を成してきた社会学と人類学が組織改編のために分割されたことをひどく惜しんだ。その背景にはこうした認識があったはずだ。
- (6) この本の第2版(1962年刊)には, 折原浩による邦訳がある。同書は『マックス・ウェーバー その学問の包括的一肖像』という題で1966年に中央公論社から出され, 1987-1988年に上下二分冊の形態で三一書房から再版が刊行されている。
- (7) この意味で, (Daniels 1972) がヒューズの「社会学的な眼 the sociological eye」を「非礼な眼 the irreverent eye」と評したのは至当である。

引用文献

- Becker, Howard S. 2005. "An Introduction to the Danish edition of *Outsiders*." In *Howie's Home Page* (<http://home.earthlink.net/~hsbecker/danishintro.htm>).
- Bendix, Reinhard. 1962. *Max Weber: An Intellectual Portrait*. Doubleday & Company. (=1987-1988. 折原 浩訳『マックス・ウェーバー その学問の包括的一肖像 (上)・(下)』三一書房.)
- Chapoulie, Jean-Michel. 1987. "Everett C. Hughes and the Development of Fieldwork in Sociology." (Translated by Michal M. McCall) *Urban Life* 15: 259-298.
- Chapoulie, Jean-Michel. 1996. "Everett Hughes and the Chicago Tradition." (Translated by Howard S. Becker) *Sociological Theory* 14: 3-29.
- Coser, Lewis A. 1994. "Introduction." Pp.1-17 in *Everett C. Hughes on Work, Race, and the Sociological Imagination* (Edited and with an Introduction by Lewis A. Coser). The University of Chicago Press.
- Daniels, Arlene K. 1972. "The Irreverent Eye." *Contemporary Sociology* 1: 402-409.
- Helmes-Hayes, Richard C. 1998a. "Everett Hughes: Theorist of the Second Chicago School." *International Journal of Politics, Culture and Society* 11: 621-673.
- Helmes-Hayes, Richard C. 1998b. "The Sociology of 'Going Concerns': Everett Hughes' Interpretive Institutional Ecology." Pp.217-249 in Luigi Tomasi (ed.) *The Tradition of the Chicago School of Sociology*. Ashgate.
- Helmes-Hayes, Richard C. 2000. "The Concepts of Social Class: The Contribution of Everett Hughes." *Journal of the History of the Behavioral Sciences* 36: 127-147.
- Hoecker-Drysdale, Susan. 1996. "Sociologists in the Vineyard: The Career of Helen Macgill Hughes and Everett Cherrington Hughes." Pp.220-231 in Helena M. Pycior, Nancy G. Slack, and Pnina G. Abir-Am (eds.) *Creative Couples in the Sciences*. Rutgers University Press.
- Hughes, Everett C. 1949. "Social Change and Status Protest: An Essay on the Marginal Man." *Phylon* 10 (First Quarter): 58-65. = SE: 220-228.
- Hughes, Everett C. 1951a. "Work and Self." Pp.313-323 in I.H. Rohrer and M. Sherif (eds.) *Social Psychology at the Crossroads*. Harper & Row. = SE: 338-347.
- Hughes, Everett C. 1951b. "Mistakes at Work." *Canadian Journal of Economics and Political Science* 17 (Aug.): 320-327. = SE: 316-325.
- Hughes, Everett C. 1956. "The Improper Study of Man." Pp.79-93 in Lynn White, Jr. (ed.) *Frontiers of Knowledge*. Harper & Row. = SE: 431-442.
- Hughes, Everett C. 1957. "The Relation of Industrial to General Sociology." *Sociology and Social Research* 41 (March-April): 251-256. = SE: 524-529.
- Hughes, Everett C. 1959. "The Dual Mandate of Social Science: Remarks on the Academic Division of Labor." *Canadian Journal of Economics and Political Science* 25 (Nov.): 401-410. = SE: 443-454.
- Hughes, Everett C. 1961a. "Review of *Max Weber: An Intellectual Portrait* by Reinhard Bendix." *Comparative Studies in Society and History* 3 (April): 341-348.
- Hughes, Everett C. 1961b. "Tarde's *Psychologie Économique*: A Forgotten Classic by a Foreign Sociologist." *American Journal of Sociology* 66 (May): 553-559. = SE: 557-565.
- Hughes, Everett C. 1961c. "Ethnocentric Sociology." *Social Forces* 40 (Oct.): 1-4. = SE: 473-477.
- Hughes, Everett C. 1962a. "What Other?" Pp.119-127 in Arnold M. Rose (ed.) *Human Behavior and Social Processes*. Routledge & Kegan Paul. = SE: 348-354.
- Hughes, Everett C. 1962b. "Disorganization and Reorganization." *Human Organization* 21 (Summer): 154-157. = SE: 65-72.
- Hughes, Everett C. 1962c. "Sociologists and the Public." *Transactions of the Fifth World Congress of*

- Sociology* 1 (Sep.). International Sociological Association. = SE: 455-463.
- Hughes, Everett C. 1963. "Race Relations and the Sociological Imagination." *American Sociological Review* 28 (Dec.): 879-890. = SE: 478-495.
- Hughes, Everett C. 1964a. "The Sociological Point of View: The Challenge of the Deep South to Research in the Social Sciences." In Robert B. Highsaw (ed.) *The Deep South in Transition*. University of Alabama Press. = SE: 159-166.
- Hughes, Everett C. 1964b. "Founders of Social Science: Robert E. Park." *New Society* (Dec. 31, 1964): 18-19. = SE: 543-549.
- Hughes, Everett C. 1970. "The Humble and the Proud: the Comparative Study of Occupations." *Sociological Quarterly* 11 (Spring): 147-156. = SE: 417-427.
- Hughes, Everett C. 1971. "Preface." Pp.v-ix in *The Sociological Eye*.
- Hughes, Everett C. 1971 = 1984. *The Sociological Eye: Selected Papers* (With a New Introduction by David Riesman and Howard S. Becker). Transaction. = SE
- Oakes, Guy and Arthur J. Vidich 1999. *Collaboration, Reputation, and Ethics in American Academic Life: Hans H. Gerth and C. Wright Mills*. University of Illinois Press.
- 折原 浩 1966=1988. 「訳者あとがき」『マックス・ウェーバー その学問の包括的一肖像 (下)』三一書房: 583-611.
- Riesman, David and Howard S. Becker. 1984. "Introduction to the Transaction Edition." Pp.v-xiv in *The Sociological Eye: Selected Papers*. Transaction.
- Strauss, Anselm L. 1996. "Everett Hughes: Sociology's Mission." *Symbolic Interaction* 19: 271-283.
- 内田 健 2003. 「デュアル・ヴィジョンの社会学—エヴァレット・ヒューズとの対話のために—」『新潟大学教育人間科学部紀要 (人文・社会科学編)』第6巻第1号: 57-75.